

## <実践記録> 平成27年度保育内容（表現・造形）の 実践報告：共同制作による学園祭校内装飾

著者	木谷 安憲
雑誌名	川口短大紀要
巻	30
ページ	203-211
発行年	2016-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000492/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000492/</a>

# 平成27年度 保育内容（表現・造形）の 実践報告

— 共同制作による学園祭校内装飾 —

木 谷 安 憲

## 1 はじめに

### 1.1 本実践研究の目的

保育内容（表現・造形）の授業では毎年9～10月に、共同でカフェテリアの上部ガラスを彩る学園祭校内装飾を行っている。15名前後のグループを1クラスとして、全12クラスが各1種類・全12種類の装飾をつくっている。普段の授業では個人制作が主になるが、この題材では共通の目標に向かって協力して制作することや、ひとり一人が大勢の中で発揮される自分の持ち味に気づき、よりよく行動していくことを目的としている。また、幼稚園や保育所に就職し園内装飾をすることになった際に、雑誌などを参考にして真似をする前に自分でつくった今回の装飾を思い出して、目の前にいる園児に合ったデザインを自分なりに考える力を育むということも目的としている。

### 1.2 本実践の概要

1コマが90分である。アイデア出しから始めて作品を完成させるまで3回の授業で行った。毎年学園祭校内装飾を制作しているとは言え、平成27年度は「つるしびなの形式を使った初めての装飾である」ことと、「材料は色画用紙、折り紙、糊、色付きの糸を使うこと」を指示し、あとは各クラスに任せた。形式を決めて中身を自由とするのは、私がワークショップでよく使う「創造のきっかけを作る」<sup>(1)</sup>手法である。図案制作の際、画像検索でスマートフォンを見ることは許可したが、市販のキャラクターを使用するのは禁止とした。

## 2 平成 26 年度までの学園祭校内装飾の内容

### 2.1 平成 25 年度までのセロファンと紙でつくったステンドグラス風の装飾

この共同制作による学園祭校内装飾の授業が行われ始めたのは平成 21 年で、私が着任する 2 年前である。前任者が、セロファンと紙でステンドグラス風の装飾制作を指導していた。私が着任した平成 23 年度以降もその流れを汲んで行っていた（図 1,2）。テーマは、平成 23 年度「鳥」、平成 24 年度「花」、平成 25 年度はクラス別のテーマを自分達で考えてもらった<sup>(2)</sup>。

制作手順としては、下絵をつくり黒紙の切り抜きをする。穴の裏からセロファンを貼り仕上げるといったものだ。4 コマの授業で完成を目指していたが、平成 25 年度は 5 コマの時間を使った。長い時間をかけただけあって、質の高い作品に仕上がった。しかし、後期授業の 3 分の 1 の時間を使うのは多すぎると感じ、また、幼稚園や保育園での壁面装飾にあまり生きないと考え、平成 26 年度からは別の形式の装飾に変えることにした。



図 1



図 2

### 2.2 平成 26 年度のガラス面装飾

ステンドグラス風の装飾をやめることに決めたのは平成 25 年度の学園祭が終わった直後である。それ以降、次に何をするか考えてはいたのだが中々いいアイデアが浮かばなかった。そこで元々の目的の一つである、就職後の園内装飾に生かせるようなものをつくることに決めた。壁面装飾ならぬガラス面装飾である（図 3~14）。ただし、本学ではガラス面へのテープ接着は禁止されている。細かい装飾は糸で吊るしてガラスの枠の部分に貼る、という形になる。その年の学園祭テーマが「音色～一人ひとりが奏でるメロディ～」だったので、全クラステーマは音楽とした。そしてその音楽というテーマに、クラスごとの味付けをしてもらって制作を開始した。



図 3 右側の大きな顔が印象的な壁面。



図 4 左はクリスマス、右はハロウィン。



図5 森の音楽隊。クラスのまとまりがあり、一番時間をかけていた。



図6 楽譜を模造紙で制作。



図7 おばけと魔女。他のクラスより広い面積。



図8 ハロウィン。糸でつなげた骸骨が面白かった。



図9 音符とハートと動物と子ども達。



図10 人物や動物を大きく配置した。



図11 クラスの学生の顔写真を使用して効果を上げている。



図12 クラスメイトの似顔絵を切り絵で制作している。



図13 鍵盤と動物と音符。



図14 ハロウィンと遊園地。

こうして写真で見ると色々なタイプの作品があって面白いのだが、実際の装飾としてはばらばらな印象を与えていた。次年度は、まとまりのある装飾を展示しようと考えた。しかし作品が持つエネルギーというものを考えると、美しくまとまっていた前年までのスタンドグラス風の装飾よりも優れている部分もある。個人、クラスそれぞれの個性を發揮することができ、なおかつ全体としてまとまりのある装飾をいかにデザインするか。一步踏み出して昨年までと違った方向に進んだ分、新しい課題が出てきたといえよう。

### 3 平成 27 年度の学園祭校内装飾の内容

#### 3.1 つるしびな形式の装飾に決まるまで

共同制作の場合、どのような題材にするのかが作品の出来不出来に大きく影響する。保育内容（表現・造形）という授業は、将来よい指導者になることを目標としているので、園児に作らせてもある程度いい作品に仕上がるような題材にしたい。その点でいえば、スタンドグラス風の装飾は園児が制作しづらい。ガラス面装飾も、どちらかといえば先生がつくる作品だ。

つるしびな形式の装飾にしようと思ったのは、2月に埼玉県ショッピングモールで吊るし雛を見たのがきっかけだ。雛の代わりに切り絵や貼り絵でパーツをつくり、それをつなげて展示すれば統一感と個性を同時に出すことができる。さらにこの形式ならば大人なら大人なりに、園児なら園児なりにいい作品に仕上げることができると考えた。以上のような理由から、平成 27 年度はつるしびな形式の装飾にすることにした。また、学園祭テーマ「ツナガリ～繋ぐ思い～」というものを今回は意図したわけではないが、作品を糸でつないでいたので、テーマと上手く合致することになった。

#### 3.2 授業の概要

##### 第 1 回

「学園祭校内装飾の説明」昨年までの作品を写真や残っている現物で見せる。今年度は初めて、つるしびなの形式を使った装飾で仕上げることを説明する。1～12 組までのテーマはこちらで設定した。1 組は 1 月、2 組は 2 月という具合に自分達のクラスの数字の月が題材だ。クラスごとに、色画用紙で 2 色、そのクラスのテーマカラーを選んでもらった。月ごと、クラスごとに特色が出るからだ。また、糸の色も決めた。各クラス、説明後すぐに相談を始め、デザインを決めどんどん色画用紙を切っていった。

##### 第 2 回

前回到引き続き、色画用紙を切り、切った色画用紙を貼っていき、一つ一つのパーツをつくって

いった。そして多穴パンチの片方を使い穴を空け、ひもを通してつるしびな形式の装飾を作っていた。

### 第3回

仕上げと展示（図15～28）。



図15 装飾の展示風景。廊下側から見たもの。



図16 装飾の展示風景。カフェテリア側から見たもの。



図17 1月。干支の動物。サイコロ。お餅など  
お正月に食べる物など。



図18 2月。鬼の顔。鬼のパンツ。  
金棒。豆など。



図 19 3月。お内裏さま。おひな様。梅。桜。蝶など。



図 20 4月。幼稚園の帽子。桜。蝶。お団子。蜂など。



図 21 5月。金太郎。兜。鯉のぼり。クマなど。



図 22 6月。かえる。水のしずく。あじさい。傘など。



図 23 7月。織り姫さま。彦星さま。天の川。竹。星など。

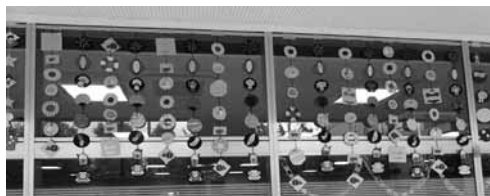


図 24 8月。ひまわり。浮き輪。スイカ。ヨット。花火など。



図 25 9月。お月見。うさぎ。団子。秋刀魚など。



図 26 10月。カボチャ。魔女。猫。お化け。運動会など。



図 27 11月。焼き芋。銀杏。きのこ。栗など。



図 27 12月。サンタクロース。ケーキ。鈴。雪の結晶など。

### 3.3 授業の感想

毎回授業の終わりに書いている感想シートだが、今回の校内装飾に関してはほとんどの学生が満足しているようだった。全クラスのを飾ってみるときれいで統一感があった、自分のクラスのものが一番良かった、クラスごとの個性が出ていてよかった、というような感想が多かった。その中に「自分一人だけハロウィンとは違う『運動会』をテーマに作ってしまったけど、ベースとなっている色が統一されていたので、浮かずになじんでいて良かったです」という、こちらが意図した色数を限定したことに触れているものもあった。また、「たくさん飾ってみると結構な量があってきれいに見えました。園でつくるのは大変だけど、季節ごとの教室の装飾としての引き出しがひろがりました」「クラスごとに飾ってみて、季節ごとになり、はっきりと何月か分かるし、全体的にすごく上手でかわいかった。先生になった時こういうのをクラスでやりたい」というような、自分が将来保育者になったことを想定している感想も若干ではあるがあった。自分がどんな作品を作ったか、クラスでどう取り組んだか、展示された他のクラスの作品はどうだったか、など多くの視点があった本実践の感想で保育者としての視点で感想を書くことは難しいのかもしれない。しかしながら冒頭に書いたように、この実践の目標のひとつは、「幼稚園や保育所に就職し園内装飾をすることになった際に、雑誌などを参考にして真似をする前に自分でつくった今回の装飾を思い出して、目の前にいる園児に合ったデザインを自分なりに考える力を育む」というものである。感想でそのような視点がかったものは190名中4名であることを考えると、次回はもう少し違ったアプローチをする必要があるかもしれない。

## 4 おわりに

ここ3年の間に3種類の学園祭校内装飾を行った。スタンドグラス風の装飾は、クラスごとにテーマを作ったとはいえ、おおむね個人制作だった。ガラス面装飾は、個人制作の部分がほとんどない共同制作だった。つるしびな形式の装飾は、1本で1作品であるという個人制作的な部分を持ちながらも、集合したものを見せていくため共同制作の要素も強い。個人制作的でもあり共同制作的でもあるということにおいては、過去に自分が行った教育実践の中でも展示して反響が多かった「アニメ美術史」<sup>(3)</sup>や「マンガ美術史」<sup>(4)</sup>と共通するものがある。そういう意味では、自分の教育活動の中でも本実践は自分の得意な部分が出せている可能性が高い（図29, 30）。

ところで、共同制作ということで、クラスによって制作の進め方に違いがあった。大きく分けると以下の三つに分類できると考えた。



- ① あまりみんなで相談せず、自分の月に関連するものを個人がそれぞれ自由に作るクラス。
- ② みんなで相談して大きな枠を決め、個人がアイデアを考えてつくっていく部分もあるクラス
- ③ みんなで相談してクラスをいくつかのグループに分け、分担してパーツをつくっていくクラス

将来保育者になって協力して仕事を進めていくことを考えると、②や③のタイプが望ましい。短い時間で多くのパーツを作ることができ、仕上がった本数も多く、展示した時に美しく見える。最も完成物が少なかったのは、①のクラスで、しかも質にばらつきがあった。しかし①の中には非常に高い能力を発揮する学生が多数いたクラスもあった。同じようなものをつくるのではなく、個々の力量を遠慮することなく発揮できたからであろう。今回の成果を全体的に見れば②の進め方が、集団の力と個人の力が最もバランスよく出せる共同制作になると思われる。次年度の校内装飾では、集団の力と個人の力をさらに発揮できるように、さらには保育者になった時の視点も獲得できるような授業をつくっていきたい。



図 29 学園祭の展示後、1～12月までの装飾を1本ずつ集めたもの（図工室に展示してある）1/2



図30 学園祭の展示後、1～12月までの装飾を1本ずつ集めたもの（図工室に展示してある）2/2

《註》

- (1) 木谷安憲, 2010, 「創造のきっかけを作るワークショップ『かいてみようシルエット』」, 『大学美術教育学会誌』, 第42号, pp.103-110
- (2) 木谷安憲, 2014, 「平成25年度の保育内容（表現・造形）の実践報告」, 『川口短期大学紀要』, 第28号, pp.169-170
- (3) 木谷安憲, 2010, 「高校美術における鑑賞と表現を一体化した授業「アニメ美術史」育てる美術の力とは?」, 『日本美術教育研究論集』, 第43号, pp.33-40
- (4) 木谷安憲, 2009, 「高等学校での実践事例 マンガ美術史——鑑賞表現一体型授業——」, 『美術教育の動向』(武蔵野美術大学出版局), pp.176-182

(提出日 2016年9月26日)